

# 同窓生シリーズ③

362・7・18



久米 豊氏 (昭和14年卒)

五月十四日

久々の雨の午後、日産自動車社長久米氏を訪問。温厚

なお人柄、また、堂々たる体軀は、一高時代、友人の策略で入らされたポート部で培われたのと。意外な程まろやかな。寛いだ声音で、物静かに往時を語って下さった。

―当時六中は、コンクリート建てのモダンな校舎でした。雨天体操場もあって。私は九人兄弟の六男で、学費は兄が出してくれるというので、合格した時の感激は、今でもはつきり覚えています。

34番の受験番号も……。そういえば、寺内君の番号も見るように頼まれていたのに、すっかり忘れて怒られましたよ。――

六中では、幼なじみの寺内大吉氏(作家)も一緒にクラスも担任も卒業まで持ち上がりだったそうで、その仲の良さは、今でも毎月十三日に同期会を開くということに示されている。羨しい限り。

その頃、六中は、鉄棒・バスケットボール等、運動が盛んであったそうだが、久米氏は身体が弱かったので自然と勉強をなされたそう。予備校もなく、添削がある程度

当時、お決まりの参考書と教科書を繰り返し繰り返しやるだけ。これは、現在にも通じることであろう。勉強といえば、子供が病気で欠席すると代りに授業を受けた親がいたそう。また、義士祭・楠公忌などには、寺へ参拝したり、芝居や講談にまで連れて行ってもらったり、雪が降れば、全校生が代々木練兵場で雪合戦、節分には出羽ヶ嶽を呼ぶという行事もあった。

―先生といえば、新聞ダネになるくらい悪い悪戯をした生徒が出た時、「この生徒を救えなくて、何が教育か!」と、物見高い世間から庇って下さった校長先生がおられました。先生と生徒・生徒同士の中にも人間的な相互信頼の関係があったと思います―六中時代の思い出はなかなか尽きない。信条を伺うと

意識ではなく、人の命令を自分に置きかえて行動すること。どんな状況の中でも自主性を貫き、自分自身納得のいく人生を作って欲しい。主張もせず、妥協するのは卑怯です。

四月一日、久米氏は、新入社員への祝辞として、人は信念と共に若く、疑惑と共に老ゆる。

ではじまるサムエル・ウルマンの「青春」という詩を紹介し、「長い歴史をもつてはいても、いつも青春を失わない会社だと言われ続けたい」と結ばれている。61年に藍綬褒章、オランダ・オランダソー・コマング勲章を受賞なさった久米氏の「新幹線型リーダーでありたい」との抱負の中にも、若さと情熱を感じた。次回回は、青井忠雄丸井社長(新三回生)に交渉中です。